mundi

May 2020 No. 80
編集・発行：独立行政法人 国際協力機構
Japan International Cooperation Agency: JICA
制作協力：株式会社 木楽舎

『mundi』（ムンディ）はラテン語で“世界”。本誌は、開発途上国の現状や、現場で活躍する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

Contents

02 目次
プロローグ Vol. 19

04 特集 南アジア
18億人の鼓動

06 結びつきを強める南アジアと日本

人材育成

【ICT×地方創生】
08 日本で活躍するIT技術者を育成 バングラデシュ

【工学・科学技術×産学連携】
12 日印タッグで生まれた成果と絆 インド

【職業訓練】
14 アパレル産業の競争力を高める パキスタン

【イノベーション】
15 未来をつなぐもの作りの場 ブータン

【防災】
16 ハードとソフトの両面で土砂災害に立ち向かう スリランカ

【行政官育成】
18 国づくりを担う若者たち アフガニスタン

【ジェンダー】
20 学びながら養う生きる力 パキスタン
21 女性たちを支える警察官を目指して アフガニスタン

【エンジニア育成】
22 日本企業もインドへ！ 新たなビジネス展開を目指して インド

24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 18
ブータン／モルディブ

26 ザ・研修⑩
地域の人々がともに支える教育現場を実現

28 地球ギャラリー Vol. 140 ミャンマー連邦共和国
写真・文●沙智 写真家
日常に息づく伝統

34 教えて！ 外務省
知っておきたい国際協力⑳

36 JICAカレンダー

38 広報室から、プレゼントほか

39 JICA PRESS

40 わたしが見つけたSDGs Vol.20

*掲載されている情報等は取材当時のものです。

世界人口の約4分の1、約18億人が暮らす南アジア地域。日本との交流も盛んで、多くの人材が育っている。

JICA ジャイカ
信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

プロローグ Vol. 19

変化する社会、変化する映画

文●松岡 環

3月22日（日）、インド時間の午後5時。インド各地に、拍手や金属のお盆などを叩く音が響き渡った。この日インドでは、新型コロナウイルスの感染拡大を抑えるため、午前7時から午後9時まで外出禁止令が出されていた。それを事前告知する映像の中でモディ首相は、「22日は家にとどまり、午後5時になったら門口やバルコニーに出て、感染防止のために闘っている人々に感謝し、5分間手や楽器を鳴らそう」と呼びかけた。前述の行動は、この呼びかけに応えたものだったのである。

その後ネットには、この行動に参加した映画スターたちのさまざまな動画がアップされた。さらにスターたちが在宅や手洗いを呼びかける動画や、3週間の外出禁止令が出た3月25日からは、「通いのお手伝いさんが来られないので」とリビングをほうきで掃いたり、トイレ掃除をしたりする動画などが上がってきた。インドでは、映画スターの影響力は大きい。経済発展で変化したインド社会だが、映画はまだまだ娯楽の王者。スターたちもそれを自覚しての啓発活動だった。

インドは、1991年の経済政策転換で外国企業に門戸を開いて以来、目覚ましい発展を遂げつつある。経済発展は人々の生活を一変させたが、映画も例外ではなく、特に97年に欧米型シネコン（シネマコンプレックス。インドでは「マルチプレックス」と呼ぶ）が誕生したのを契機に、インド映画は変化の大波に洗われ始めた。

まず、インド映画を特徴づけていたソング＆ダンスシーンが大幅に減少した。今では歌は、ほとんどがBGMとして使用される。そして、上映時間が短くなった。3時間枠を満たすことが要求された映画館時代とは異なり、シネコンは上映時間がフレキシブル。2時間少々の作品でもOKなのだ。さらに、娯楽要素をいろいろ盛り込むスタイルも少なくなり、ハリウッド映画の影響もあってか、サスペンスなど一つのジャンルに特化した映画が増えている。

形態の変化とともに、描かれる内容も変わってきた。よりリアルになり、社会問題を取り上げる作品が増えたのだ。中でもフェミニズムの視点を盛り込んだ作品が目立ち、『マダム・イン・ニューヨーク』（2012）、『ダンガル きっと、つよくなる』（2016）、『パッドマン 5億人の女性を救った男』（2018）など、日本公開作だけでも何本も挙げることができる。また、社会的・経済的格差を描き出した『ガリーボーイ』（2019）や『あなたの名前を呼べたなら』（2018）など、貧富の差や身分の差を正面から扱った作品も出現し始めた。

観客に夢を与えることで、明日への活力源となってきたインド映画は、今世紀に入り、現実世界を描くことで観客を鼓舞する存在に変わりつつある。実際の出来事や、実在の人物に材を求める作品も増え、ヒーロー、ヒロイン像も変化してきた。スターたちもまた、リアルな人物像を生み出すべく、演技力に磨きを掛けている。

2019年は、ハリウッド映画としては初めて、『アベンジャーズ／エンドゲーム』がインドの興行収入第1位となった。だが、全体から見ると興行収入に占めるインド映画の割合は85パーセントで、圧倒的に自国映画が強い。その観客の期待に応えて、スターをはじめとする映画人は社会的な役割も果たそうと、コロナ禍の中でも奮闘している。

イラスト●中村知史

松岡 環（まつおか・たまき）
アジア映画研究者。1949年生まれ。大阪外大（現大阪大）でヒンディー語を専攻し、76年からインド映画の紹介と研究を開始。のちに対象をアジア映画全般に広げる。著書に『アジア・映画の都 香港～インド・ムービーロード』（めこん、1997）、『インド映画完全ガイド マサラムービーから新感覚インド映画へ』（世界文化社、2015）など。『ムトゥ 踊るマハラジャ』『きっと、うまくいく』などインド映画の字幕も多数担当。